

令和5年度新潟県病害虫発生予察情報・予報第6号
(8月の発生予想)

令和5年7月31日

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【水稲】

穂いもち	量：やや少ない 程度：少発生	① 7月下旬の葉いもち発生量は平年並。(±) ② 梅雨明けは7月21日(平年7月23日)と平年より早まり、上位葉への葉いもち進展や、出穂した品種での穂への感染を抑制する。(－) ③ 向こう1か月の気温は平年比高く(－)、降水量、日照時間ともはぼ平年並(±)と予想されている。
【防除上の留意事項】 ① ほ場の葉いもち発生状況を確認し、発生程度に応じた防除対応を行う。特に新之助や多肥栽培および転作跡での発生に注意する。 ② 粉・液剤による防除の散布適期は、1回散布では出穂期、2回散布では出穂期直前と穂揃い期である。粒剤は薬剤により散布時期が異なるため、最新の「防除指針」を参照し適期に施用する。		
紋枯病	量：並 程度：少発生	① 7月下旬の発生量は平年比やや少ない。(－) ② 向こう1か月の気温は平年比高く(＋)、降水量はほぼ平年並(±)と予想されている。
稲こうじ病	量：やや少ない 程度：少発生	① 前年の発生量は平年比やや少なく、伝染源量は平年比やや少ないと推測される。(－) ② コシヒカリの幼穂形成期以降の降雨日数は平年比やや少ない。(－) ③ 向こう1か月の気温は平年比高く(－)、降水量はほぼ平年並(±)と予想されている。
【防除上の留意事項】 ① 発病が確認されたほ場は無発病ほ場と別に収穫し、乾燥・調製も別々に行う。 ② 粗選機を使用して発病粒を除去し、玄米への混入を防ぐ。特にインペラ式粃すり機は発病粒の混入が多い粃には適さないため、必ず粗選機を併用する ③ 調製時には、被害を助長する「肌ずれ」を防止するとともに、流量を調節して丁寧に粃すり・選別を行う。		
ニカメイチュウ	量：並 程度：少発生 (被害株率1～29%) 時期：やや早い (第1世代発蛾最盛期 7月第6半旬頃)	① 7月下旬の被害量は平年比やや少ない。(－) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)
セジロウンカ	量：並	① 7月下旬の水田内すくい取り虫数は平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【水稻】 つづき

ツマグロヨコバイ	量：多い 程度：少発生	① 7月下旬の水田内すくい取り調査では平年比多い。(+) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(+)
斑点米カメムシ類	量：やや多い 時期：並	① 7月下旬の畦畔雑草地での確認虫数は平年に比べアカスジカスミカメがやや多い、アカヒゲホソミドリカスミカメが少ない、オオトゲシラホシカメムシがやや少ない。(＋～) ② イネの出穂期は平年比やや早いと予想されている。(+) ③ 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(+)
<p>【防除上の留意事項】</p> <p>① 斑点米カメムシ類の防除実施時期までに畦畔除草を行い、薬剤散布時には雑草が繁茂していない状態を保つ。</p> <p>② 品種ごとに出穂期を確認し、防除適期に合わせ確実に薬剤防除を実施する。</p>		
イネツトムシ	量：並 程度：少発生 (被害株率1～30%)	① 7月下旬の被害量は平年比やや少ない。(－) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(+)
イネアオムシ (フタオビコヤガ)	量：やや少ない 程度：少発生 (株当たり最高寄生数 1～10頭)	① 7月下旬の幼虫発生量は平年比やや少ない。(－) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
コブノメイガ	量：並	① 7月下旬の被害発生は平年並。(±)
コバネイナゴ	量：やや多い 程度：少発生 (株当たり最高寄生数 1～10頭)	① 7月下旬の発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(+)

【大豆】

紫斑病	量：並	① 前年の紫斑粒の発生は平年並で、伝染源量は平年並と推測される。(±) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
フタスジヒメハムシ	量：少ない	① 7月下旬の第1世代成虫の発生量は平年比少ない。(－)
アブラムシ類	量：並	① 7月下旬の発生量は平年比やや少ない。(－) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【大豆】つづき

ハダニ類	量：並	① 7月下旬の発生量は平年比やや少ない。(－) ② 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)と予想されている。
ウコンノメイガ	量：並 時期：並	① 7月下旬の被害発生は平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
【防除上の留意事項】 前年多発生した地域や大豆の生育が旺盛な場合は、多発生しやすいので注意する。		
ツメクサガ等 食葉性鱗翅目幼虫	量：並	① 7月下旬の被害発生は平年比やや少～並。(－～±)
マメシンクイガ	量：やや少ない	① 前年の発生量は平年比やや少なく、幼虫の越冬量は平年よりやや少ないと推測される。(－)
【防除上の留意事項】 防除適期は8月第6半旬～9月第2半旬であるが、薬剤の種類により時期や回数に違いがあるので、最新の「防除指針」を参照する。		
カメムシ類	量：並	① 予察灯等におけるクサギカメムシの誘殺数は平年比やや少～並。(－～±) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)

【なし】

黒斑病	量：やや少ない 程度：少発生 (発病葉率1～5%)	① 7月下旬の発生量(発病葉)は平年比やや少ない。(－) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
黒星病	量：並～やや多い 程度：少発生 (発病葉率1～5%)	① 7月下旬の発生量(発病葉)は平年並であるが、中発生園地が認められている。(±～+) ② 向こう1か月の気温は平年比高く(－)、降水量はほぼ平年並(±)と予想されている。
【防除上の留意事項】 ① 発病葉、発病果は見つけ次第除去し、土中深く埋める等適切に処分する。 ② 徒長枝を整理して薬剤がよくかかるようにする。また、薬液のかかりにくい園地の周縁部は補正散布を行う。 ③ 気象予報に留意し、降雨前散布を励行するとともに、かけむらのないよう丁寧に散布する。 ④ 耐性菌の発生を抑制するため、作用機構の同じ薬剤の連用は避け、作用機構の異なる剤をローテーション使用する。 ⑤ 薬剤防除の際には、収穫前日数等の農薬使用基準に十分注意する。 ⑥ 翌年に伝染源を持ち越さないように、秋期防除及び休眠期の落葉処理を実施する。		

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【なし】つづき

褐色斑点病 (西洋なし)	量：並 程度：少発生 (発病葉率1～5%)	① 7月下旬の発生量(発病葉)は平年比やや少ないが、中発生園地が認められている。(－～±) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
<p>【防除上の留意事項】</p> <p>① 発病葉、発病果、発病枝はせん除し、園外に持ち出し適切に処分する。</p> <p>② 徒長枝を整理して薬剤がよくかかるようにする。また、二次伸長枝は発病しやすいので、せん除し園外に持ち出し適切に処分する。</p> <p>③ 気象予報に留意し、降雨前散布を励行するとともに、かけむらのないよう丁寧に散布する。また、薬液のかかりにくい園地の周縁部は補正散布を行う。</p>		
ナシヒメシクイ	量：やや多い 程度：少発生 (被害果率1～2%)	① 7月下旬までの被害果は未確認で平年並。(±) ② 7月下旬までのフェロモントラップでの誘殺数は平年比多い。(＋) ③ 有袋栽培等の物理的防除の実施率が高い。(－) ④ 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)
<p>【防除上の留意事項】</p> <p>① 被害果を見つけた場合は、土中深く埋めるなど適切に処分し、成虫の発生を防ぐ。</p> <p>② 例年発生のみられる園地では、幼虫発生期である7月下旬～8月上旬、8月中下旬の防除を徹底する。なお、防除の際には収穫前日数等の農薬使用基準に十分注意する。</p> <p>③ 果実被害は収穫期が遅いものほど多くなる傾向があるので、中生～晩生品種(豊水、新高など)は特に注意する。</p>		
モモシクイガ	量：やや少ない 程度：少発生 (被害果率1～2%)	① 7月下旬までの被害果は未確認で平年並。(±) ② 7月下旬までのフェロモントラップでの誘殺数は平年比やや少ない。(－) ③ 有袋栽培等の物理的防除実施率が高い。(－) ④ 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)
ハマキムシ類	量：並～やや多い 程度：少発生 (被害葉率1～15%)	① 7月下旬の発生量(被害葉)は平年並。(±) ② 7月下旬までのリンゴコカクモンハマキのフェロモントラップ誘殺数は平年比多い。(＋) ③ 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)
果樹カメムシ類	量：並 程度：少発生 (被害果率1～2%)	① 7月下旬までの被害果は未確認で平年並。(±) ② 7月下旬までの予察灯での誘殺数は平年比やや少～並。(－～±) ③ 有袋栽培等の物理的防除実施率が高い。(－) ④ 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)

<p>【作物名】 病害虫名</p>	<p>予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比</p>	<p>予報の根拠</p>
-----------------------	--	--------------

【なし】つづき

<p>ハダニ類</p>	<p>量：並～やや多い 程度：少発生 (寄生葉率 1～15%)</p>	<p>① 7月下旬の発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)と予想されている。</p>
<p>【防除上の留意事項】</p> <p>① 徒長枝を整理して薬剤がよくかかるようにする。 ② ハダニ類は、薬剤抵抗性が発達しやすいため、同一殺ダニ剤の使用は原則として年1回とし、作用機構の異なる薬剤をローテーション使用する。 ③ 収穫時期が近い品種については、農薬の使用時期(収穫前日数)に注意する。</p>		

【もも】

<p>せん孔細菌病</p>	<p>量：やや少ない 葉の発生程度：中発生 (発病葉率 11～30%) 果実の発生程度：少発生 (発病果率 1～5%)</p>	<p>① 7月下旬の発病葉及び発病果の発生量は、平年比やや少ない。(－) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)</p>
<p>【防除上の留意事項】</p> <p>① 新梢に発生する夏型枝病斑は見つけ次第せん除し、また、収穫残りの発病果は放置せず、摘除し土中深く埋める等適切に処分する。 ② 次年度の伝染源密度低減を図るため、収穫後は速やかに無機銅剤を2週間おきに感染確率の高い10月中旬まで2～3回散布する。</p>		
<p>灰星病</p>	<p>量：多い 程度：少発生 (発病果率 1～5%)</p>	<p>① 7月下旬の発生量(発病果)は平年比多い。(＋) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)</p>
<p>【防除上の留意事項】</p> <p>① 発病果及び腐敗果実は見つけ次第取り除き、土中深く埋める等適切に処分する。 ② 品種により収穫期が異なるので、薬剤防除にあたっては隣接園地への飛散に十分注意するとともに、収穫前日数等の農薬使用基準に十分注意する。</p>		
<p>モモハモグリガ</p>	<p>量：やや少ない 程度：少発生 (被害葉率 1～15%)</p>	<p>① 7月下旬の発生量(被害葉)は平年比やや少ない。(－) ② 7月下旬までのフェロモントラップでの誘殺数は平年比やや少ない。(－) ③ 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)</p>

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【もも】つづき

ナシヒメシンクイ	量：やや多い 程度：少発生 (被害果率1~2%)	① 7月下旬の被害新梢の発生量は平年比多い。(+) ② 7月下旬に被害果は未確認で平年並。(±) ③ 7月下旬までのフェロモントラップでの誘殺数は平年比多い。(+) ④ 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(+)
	【防除上の留意事項】 ① 被害果は見つけ次第摘除し、土中深く埋める等適切に処分する。 ② 新梢の芯折れは見つけ次第切り取って土中深く埋める等適切に処分する。 ③ 発生がみられる園地では、第3世代幼虫発生期にあたる7月下旬~8月上旬に薬剤防除を行う。なお、防除の際には収穫前日数等の農薬使用基準に十分注意する。	
モモシンクイガ	量：やや少ない	① 7月下旬までの被害果は未確認で平年並。(±) ② 7月下旬までのフェロモントラップでの誘殺数は平年比やや少ない。(－) ③ 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(+)
ハダニ類	量：多い 程度：中発生 (寄生葉率16~30%)	① 7月下旬の発生量(寄生葉)は平年比多い。(+) ② 向こう1か月の気温は平年比高く(+)、降水量はほぼ平年並(±)と予想されている。
	【防除上の留意事項】 ① 激しく加害されると早期落葉するため、発生状況に注意し、必要に応じて薬剤散布を実施する。 ② 薬剤防除にあたっては、収穫前日数等の農薬使用基準に十分注意する。	

【ぶどう】

晩腐病	量：並 程度：少発生 (発病果房率1~10%)	① 7月下旬までの発病果は未確認で平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
	【防除上の留意事項】 発病粒は見つけ次第除去し、土中深く埋める等適切に処分する。	
べと病	量：並 程度：少発生 (発病葉率1~10%)	① 7月下旬の発生量(発病葉)は平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は平年比高く(－)、降水量はほぼ平年並(±)と予想されている。
	【防除上の留意事項】 ① 発病した葉や果粒は見つけ次第除去し、土中深く埋める等適切に処分する。 ② デラウェアは収穫終了後に葉の健全性維持のため防除を必ず行う。大粒種では9月以降も発生が増加するので、予防散布に努める。	

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【ぶどう】 つづき

褐斑病	量：並 程度：少発生 (発病葉率 1～10%)	① 7月下旬の発生量(発病葉)は平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
ペスタロチアつる枯病	量：並 程度：少発生 (発病果房率 1～10%)	① 7月下旬現在、発生は未確認で平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
フタテンヒメヨコバイ	量：並 程度：少発生 (被害葉率 1～25%)	① 7月下旬の被害葉の発生は未確認で平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)

【かき】

すす点病	量：並 程度：少発生 (発病葉率 1～5%)	① 7月下旬の発病果は未確認で平年並。(±) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
チャノキイロアザミウマ	量：並 程度：少発生 (発病葉率 1～2%)	① 7月下旬の被害果は未確認で平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)
果樹カメムシ類	量：並 程度：少発生 (被害果率 1～2%)	① 7月下旬の被害果の発生量は平年並。(±) ② 予察灯の誘殺数は平年並。(±) ③ 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)

【秋冬ねぎ】

さび病	量：やや少ない 程度：少発生 (発病度 1～5)	① 7月下旬の発生量は平年比やや少ない。(－) ② 向こう1か月の気温は平年比高く(－)、降水量はほぼ平年並(±)と予想されている。
黒斑病・葉枯病	量：やや多い 程度：少発生 (発病度 1～20)	① 7月下旬の発生量は平年比やや多い。(＋) ② 向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予想されている。(±)
軟腐病	量：並～やや多い 程度：少発生 (発病株率 1～5%)	① 7月下旬の発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は平年比高く(＋)、降水量はほぼ平年並(±)と予想されている。
ネギハモグリバエ	量：並 程度：中発生 (被害度 21～30)	① 7月下旬の発生量は平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)
ネギアザミウマ	量：並 程度：多発生 (被害度 21～30)	① 7月下旬の発生量は平年比やや少ないが、甚発生ほ場も認められた。(－～＋) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)
<p>【防除上の留意事項】 盛夏期前から密度が急増するので発生状況に注意し、発生が多いほ場では、定期的に防除を行い、密度抑制に努める。</p>		

<p>【作物名】 病害虫名</p>	<p>予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比</p>	<p>予報の根拠</p>
-----------------------	--	--------------

【秋冬ねぎ】つづき

<p>ネギコガ</p>	<p>量：並 程度：少発生 (被害株率1~25%)</p>	<p>① 7月下旬の発生量は未確認で平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)</p>
<p>シロイチモジヨトウ</p>	<p>量：並 程度：少発生 (被害株率1~10%)</p>	<p>① 7月下旬の発生量は未確認で平年並。(±) ② フェロモントラップの誘殺数は平年並。(±) ③ 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)</p>

【その他】

<p>【アブラナ科野菜】 コナガ</p>	<p>量：やや多い</p>	<p>① フェロモントラップの誘殺数は平年並～多い。(±～＋) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(－)</p>
<p>【野菜類全般】 オオタバコガ</p>	<p>量：やや少ない</p>	<p>① フェロモントラップの誘殺数は平野部では平年比やや少ない～並(－～±)、山間部では平年比やや少ない。(－) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)</p>
<p>【全般】 ハスモンヨトウ</p>	<p>量：やや多い</p>	<p>① フェロモントラップの誘殺数は平年並～多い。(±～＋) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)</p>

～ 防除上の注意事項は、最新の「新潟県農作物病虫害雑草防除指針」を参照してください ～

注1：①「予報内容」の発生量は、予想される発生量が、新潟県における平年の発生量に比べて多いか少ないかを、少、やや少、並、やや多、多の5段階で表記しています。
②発生程度は、予想される発生量が、国の調査実施基準等で定められている、無発生、少発生、中発生、多発生、甚発生のいずれに該当するかを表記しています。

注2： 「予報の根拠」の、（+）は発生量を増加させる要因、（-）は発生量を減少させる要因、（±）はどちらともいえない要因を示しています。

～ 農薬は適正に使用しましょう ～

【新潟県農薬危被害防止運動実施期間：6月1日～8月31日】

- 農薬の準備・使用にあたっては、必ず最新の農薬登録情報を確認しましょう。
- 使用に際しては、ラベルに記載の使用基準や注意事項をよく読み、使用者が責任を持って使いましょう。
- 農薬の飛散防止に努めましょう。周辺作物や住宅及びミツバチ等への危害防止のため、周辺の生産者や住民、養蜂業者に事前に防除計画を通知するなどの対策をとりましょう。
- 農薬の使用後は防除日誌や作業日誌等の記帳に努めましょう。
- 水田で湛水して農薬を散布する場合は、処理後7日間の止水を厳守し、落水しないようにしましょう。

新潟県病虫害防除所業務課

電話：0258-35-0867

FAX：0258-35-7445

<https://www.pref.niigata.lg.jp/sec/bojo/>

【参考】北陸地方 1か月予報（7月29日から8月28日までの天候見通し）
 （新潟地方気象台：令和5年7月27日発表）

＜予想される向こう1か月の天候＞

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。
 特に、期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。

向こう1か月の平均気温は、高い確率70%です。
 週別の気温は、1週目は、高い確率70%です
 2週目は、高い確率70%です。
 3～4週目は、高い確率50%です。

＜向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）＞

	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	10	20	70
降 水 量	30	40	30
日照時間	30	40	30

＜気温経過の各階級の確率（%）＞

	低い	平年並	高い
1週目（7月29日～8月4日）	10	20	70
2週目（8月5日～8月11日）	10	20	70
3～4週目（8月12日～8月25日）	20	30	50